

小さい者の一人が減びることは天にいますあなたがたの父のみ心ではない。



社会福祉法人 小羊学園

〒431-1304

静岡県浜松市北区細江町中川7440-1

電話：053-437-0826 FAX：053-437-0849

E-mail kohitsuji@imix.or.jp

H.P <http://www.kohitsuji.or.jp/>

発行人：稲松義人

印刷所：聖隷サービス(有)

定価：一部30円

2007年12月20日

第 299 号

コミュニティづくりの

お手本

浜松友の会の例会に出席して

理事長 稲松義人

先日私は、浜松友の会のクリスマス（十二月例会）に小羊学園の話をする機会が与えられ、初めて友の会の活動拠点である「友の家」を訪ねました。小羊学園にはむかしから、いくつもの女性のグループが定期的にボランティアに来てくださっており、浜松友の会もその中の一つです。

友の会は、一九〇三年に創刊された「婦人之友」という女性誌の読者によって広がった全国組織で、全国友の会のホームページによると、一九三〇年に創立され、全国に二万二千人の会員がいるとのこと。近くに住む会員数名からなる「もより会」で、婦人之友誌の創刊者である羽仁もと子の著作の読書会をしたり、衣食住や家計についての学習会や情報交換をしたりという日常の交流があり、支部ごとにも毎月例会がもたれます。浜松友の会でも友愛セールとか、家事と家計の講習会とか、子ども・乳幼児グループなどのプログラムを通して交流の場がもたれています。また、近隣の施設等での奉仕活動にもずっと取り組んでこれられよう、実は小羊学園での長年にわたるご

奉仕もこの一環として来てくださっていたのです。

浜松友の会のクリスマス当日は、高齢の方から若い方まで七〇名を超える会員が集まっておられました。約一時間、私の話をお聞きくださったあと、各セッションからのお知らせや報告がなされたり、当日新しく会員となった方が紹介されたり、年末のお掃除に効率よく取り組むためのアドバイスなどが紹介されたりと、活気にあふれた集まりでした。

むかしは、多くの女性が結婚とともに主婦となり、もっぱら家庭を守り、近隣社会との交流・互助を担ってきたのだと思います。しかし、産業の振興とともに、都市型社会が拡大し、核家族化と就労する女性の増加などにより、消費生活レベルでの交流の場は少なくなってきたと思われます。今は衣食住や育児や介護などについても、新聞やテレビなどの各種メディアからの情報に頼り、人と人との交流を通じて情報や技術が伝達される場面が少なくなっているのではないのでしょうか。

実は最近、生活支援施設においても似たような課題が感じられます。施設全体を生活単位とした支援から、ユニットケアやグループホーム・ケアホームという小さい単位での生活支援をめざすとき、以前のように先輩職員も含め大勢の同僚と一緒に働きながら現場で学ぶというかたちが取り難くなっている

ます。一人で働く場面が多く、ちょっとしたことへの対応に戸惑いや不安を感じることを聞かれます。また心理的に孤立感を感じることもあるようです。そしてこれは地域の中にあつて、不安や焦燥感、孤立感を感じながら子育てをしている若いお母さんたちの状況に重なるような気がします。このような心理的なゆとりのなさ、社会的に大きな問題となっている児童虐待の一つの要因でもあると思われます。

小羊学園でも、利用者支援のための必要な知識や技術を伝達するためのシステムや、課題解決へ向けての情報交換や協力ができる組織の必要性を感じており、私自身も「これからの福祉は家庭と地域（コミュニティ）の再生が課題だ」と主張しながら、そのための具体的な方策についてはなかなかイメージがもてませんでした。

羽仁もと子は、日本で初めての女性新聞記者だったそうですが、社会を見つめるジャーナリストの視点と、家庭と地域のコミュニティを担ってきた女性としての視点とを合わせもつことによって、生活者の視点に立った自主参加型の互助組織の発展に大きな示唆を与えてきたのではないかと思います。友の会に見るように、地域の中で、衣食住や育児、介護等、さらには家計といった日常生活の課題について取り組む組織こそ、今求められている地域福祉の担い手ではないかと思いました。

小羊学園の明日を担う職員を養成するために

社会福祉の仕事を取り巻く環境がどのように変わろうか、その根底を支えるのは職員の資質だろうと思っています。新しい環境の中でも小羊学園が大切にしていること、これまでの経験から学び継承して欲しいことを伝えたいこの思いから、今年度初めて、小羊学園児童寮・青年寮では、現場で働く若い職員を対象にして毎月一回のペースで講座を開催してきました。

九月（第五回）には、山崎陽司事務長に、児童寮、青年寮での現場での経験、小羊デイケアホームの立ち上げに携わった経験、またその後施設の運営に関わるようになった経験を通じて、小羊学園で働くことの楽しさについて話してもらいました。

一〇月（第六回）は、創立者山浦俊治先生の誕生月でもあり、著書の「この子らは光栄を異にす」からいくつかの文章と一緒に読みながら、山浦先生の小羊学園についての思いや、小羊学園が大切にしてきたことについて学び合いました。

十一月（第七回）は、「記録の書き方、読み方」というテーマで、毎日のように向き合っている様々な「記録」の意味について一緒に考えました。

どのような内容がよいか、まだ試行錯誤の段階ですが、参加者に書いてもらっている感想文を一部紹介してみることにしました。

第五回

「小羊学園の楽しい仕事」

青年寮 鈴木悦子

楽しい仕事と聞いて、今現在、私はどのような思いで仕事をしているのかということについて考えさせられました。楽しい仕事とはいったいどういう仕事なのか、一つひとつの単語の言葉の意味をたどってつなげていくことで、その意味が見えてきました。そして「小羊学園」という名前の言葉の意味を知り、初心に帰る思いがしました。「弱々しい一匹では生きられない。牧者がいなければ死んでしまう小羊が教えを受ける場所」という意味を知り、支援を必要としている方たちを支えていく仕事、そんな仕事をしてみたいという強い思いをもって就職したことを思い出しました。

山崎さんの昔の話を聞いて、新しいことをはじめるためには本当にやりたいという強い気持ちと困難を切り抜けていく多くのアイデアと、そこに共感し後押ししてくれる上司の方がいたということなど、お話の中で仕事に対してのやる気や楽しさを感じることが多かったです。すごく楽しそうに話される山崎さんが印象的でした。何かを交

えていきたいという思いがなければ、色んなことに気付いていくことができないと思うし、また、気付いたとしても何かに躓き、途中であきらめてしまうことが多かったように思いました。

また、今回、モチベーションについての話を聞いて感じたことは、今までの色々な研修の中で、職員がゆとりをもって利用者さんに対して接するのがよいということや、意識していくことで現状を変えていけるということなどは、何度か聞くことがありましたが、モチベーションということについてはあまり考えることがありませんでした。今回、話を聞いて納得させられる部分が多くあり、職場でのモチベーションの大切さを感じました。今までも言葉使いや介助の仕方など、支援のあり方についての話し合いをしてきましたが、職員がしっかりとモチベーションをもっていないければ継続できません。モチベーションを保っていくことは、仕事をする上で大切だと思う反面、保つのがとても難しいと感じました。人を相手に仕事をする中で生まれる感情の波や現場で起こる楽しいことや悲しいことなど、そのすべてがモチベーションに関わっていると感じます。今の現状に満足しすぎてしまうことなく、山崎さんの話も思い出しつつ、自分のやる気につなげていけたらきっと楽しい仕事にもつながっていくのではないかと思います。現場の職員みんなでモチベ

ションを高め、より良い利用者さんへの支援につながっていくようにがんばりたいです。



障がいのある子と共に楽しむクリスマス会に参加
12月9日（浜松市県居公民館にて）

第六回

「この子らは光栄を異にす」を読む

児童寮 中村友紀

今回の講座では、小羊学園の創立者山浦先生が出版された本を読みました。一番初めに登場する足立愛子さんの出来事は、研修や職員の話の中でも何度か聞く機会がありましたので、とても印象強く残っています。意識がはつき

りしない中、病院のベッドの上で、学園の子どもたちのことを想い、自然と身振りで表現された愛子さん。もし自分自身が同じ状況であつたらどうだろう、と考えさせられます。私は小羊学園に就職して、もう二年目になります。この二年でどれだけ利用者のかを振る返ると、ただ日々を追われて、見失っていることがとても多いように感じます。『学ぶ』という姿勢を常に持ち続けていきたいです。

また、この本には、今も小羊学園で生活されている利用者の幼い頃の出来事もいくつも載せてくださってあるため、とても身近に感じて読ませていただきました。その子どもが生まれてから、どんな環境で育ってきたのか、支援する上で知っておく必要があるように感じました。よく利用者の支援方法を考えていく中で、目先のことばかりに囚われず、広い視野を持つことが大切と聞きますが、今まで広い視野が具体的にどの辺なのかを見出しにくかったのですが、その子どもの生育歴や、入所に至る背景を捉えると自然に見えてくるのだらうと感じました。また、山浦先生から見た観点での当時の職員と利用者の関わりも載っており、山浦先生の感性の豊かさを感じました。この豊かな感性は、最後に出てきた『価値論・意味論』にもつながるように感じます。支援をする中でその意味を問

い続けていく上で、色々な観点から物事を見るためにも、職員の様々な感性も影響してくるのではないのでしょうか。職員が豊かな感性を持っていることは、利用者一人ひとりの人生がいかに豊かなものになるか、大きく関わってくるのだらうと思いました。



キャンドルサービス (12月14日)

第七回 「記録の書き方、読み方」

青年寮 吉田 明日香

今回は「記録」がテーマであった。改めて見直してみると、記録は普段の支援の中で起こったことを文章にして残すだけではなく、その記録を基に今後の支援を考えていくことまでつなげ

ていく必要があると思った。

記録を読み返し、最近の利用者の様子を振り返りながら必要な支援を考えたいということが、まだまだ足りないように思う。特に青年寮の現場では、多くの利用者を何人かの職員で見守り、勤務する職員も日々変わっているため、一人ひとりじっくり見ていくことが難しいように感じる。また、毎年、個別支援計画書を見直しているが、一人ひとりに内容に添った支援を行い、記録に残っているかと考えると、なかなかできていないのが現状のように思われる。

ひだまり（地域にある青年寮の自活訓練棟）では、五人の利用者を一人の職員で見ているので、個人記録の前に個別支援計画書のコピーを綴り、個人記録にその日の様子を記録しているの、比較の流れとしてはよいものになっていると思う。今後、施設においてもユニットケアになった時には、生かせるのではないかと思う。

しかし、日中活動の場と生活の場を分かれているため、両方に記録があり、整理が大変になったり、二重に記録を書いたりといったことが生じてくる。

確かに二重になってしまふのは効率的ではないかも知れないが、どちらから、その時その時の様子を知っておきたいところもあり、記録として必要な記録なのではないかと思う。

記録は利用者一人ひとりにとって大

切なデータである。家族の方や学園の職員以外の人にも開示することが出てくるかも知れない。あまり知らない人にもわかっていただけるように、読みやすく、分かりやすく書くことも必要なのだと感じた。



キャンドルサービスのあと、楽しいケーキのひととき

第四回以前のテーマは、第一回（五月）「利用者への接し方」、第二回（六月）「小羊学園で働く上での基礎知識」、第三回（七月）「食事、トイレ、入浴の介助」、第四回（八月）「移動支援、外出支援」でした。

今後のテーマは、第八回（二月）「てんかんの理解と発作への対応」、第九回（一月）「自閉症の理解と対応での配慮」、第一〇回（二月又は三月）「チームワーク」の予定です。

コミュニティの再生をめざす⑥ 教会の礼拝堂を借りて、 キャンドルサービスをしました

一二月一四日の夕方、児童寮、青年寮、温心寮からそれぞれ車に分乗して、あるいは歩いて、近くの教会に出かけました。例年は青年寮のホールでしてきたクリスマスキャンドルサービスを、今年初めて本物の教会の礼拝堂を借りて楽しみました。

小羊学園の仕事が、小羊学園という施設の中だけでの生活支援にとどまっていたら、その共同体は小さなコミュニティとしての雰囲気が強くなってしまします。たとえどんな障がいがあっても、利用者の皆さんが地域のコミュニティの中で暮らしていけるよう願うとき、小羊学園での支援をきっかけとして、多くの人たちとつながることを演出しなければならぬと思っています。クリスマス行事もこれまででは小羊学園の中で催されてきましたが、今年は、学園を初めて飛び出してみることにしました。いつも散歩で前を通る遠州栄光教会三方原礼拝堂が新しいきれいな会堂に建て替えられたのを機会に、その新しい会堂をお借りして、小羊学園のクリスマスキャンドルサービスをすることにしたのです。

この礼拝堂はもとも今の聖隷三方原病院が聖隷保養農園と呼ばれ、結核



キャンドルサービス、遠州栄光教会三方原会堂にて

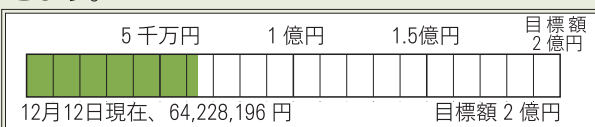
の療養所であった頃に、職員が集まって礼拝をするために建てられたのだそうです。病院も周辺の施設や学校も昔と違って大きく変わりました。遠州栄光教会も今の時代に合わせて、広く地域に開かれた教会にしていきたいとの思いで建て替えられたということで、小羊学園がお借りすることを喜んで受け入れてくださいました。

本物のろうそくの灯りというわけにはいきませんでした。青年寮のホールでしてきた昨年までのキャンドルサービスよりも、「聖夜」という雰囲気のする静かなクリスマスの夕べを過ごしました。キャンドルサービスの後は、教会の集会室をお借りして、いつものようにみんなで、美味しいケーキと紅茶をいただきました。

支える会だより

移転改築のための特別募金の報告

厳しい状況の中、何とか施工業者が決まり、11月末に着工いたしました。これから約10ヶ月の工事になる予定です。予定通りいけば、来年秋には新しい施設へ移ることになります。限られたスタッフで毎日忙しくしており、ご寄付に対するお礼が遅れてしまっています。お許しください。目標達成にはまだまだ努力が必要ですが、多くの皆さまから励ましをいただいております。ありがとうございます。どうぞ、目標達成のために祈りください。皆さまの周囲で新たに協力いただけた方をご紹介いただければ幸いです。今回も心からの感謝をもって中間報告をさせていただきます。



小羊学園・移転改築計画にご協力ください

(口座名義)「小羊学園を支える会」

郵便振替口座 00890-4-45415

りそな銀行浜松支店 (普通) 040005

静岡銀行細江支店 (普通) 043483

必要があれば、募金のお願ひ(振込用紙)を、お送りいたします。下記へご連絡ください。

問い合わせ先：小羊学園

〒431-1304 浜松市北区細江町中川 7440-1

電話 053-437-0826

アシスタントスタッフ

をしてみませんか

重い知的ハンディのある人たちの生活支援に補助的なスタッフとしてチャレンジしてみませんか。小羊学園では、職員を補助してくれるボランティアスタッフ、パート職員を募集しています。

実際の活動(勤務)時間、日数は相談に応じます。年齢、性別、資格、経験は問いません。関心のある方、是非一報ください。活動(勤務)場所は、小羊学園児童寮、青年寮(浜松市北区細江町中川七四〇)または周辺の小羊学園の地域ホーム(温心寮、ひだまり、あゆみホーム)です。

連絡先・電話 〇五三・四三七・〇八二六

編集後記

新しい年は、移転改築する小羊学園にとって文字通り新たなスタートの年になります。私たちが何を大切にしなければならぬのか。信念をもって新年を迎えたいと思います。

小羊学園は、重い知的ハンディのある人たちを中心にしたコミュニティでありたいと願っています。それは職員やご家族だけではなく、様々なかたちで関わってくださる皆さまによってかたちづくられると思っています。

どうぞ、新しい年が皆さまにとりましても希望に満ちた年となりますように、平安をお祈りいたします。(I)